セントラルケンタッキー日本人補習校　　令和５年（2023）７月 29 日

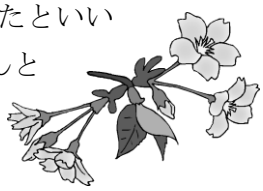
ＣＫＪＳだより

第 53 号

校長　松平　昭二

shoji_matsudaira@hotmail.co.jp

一行の思い



「男はつらいよ」の渥美清さんは、外国の旅先で毎日はがきを出していたといいます。旅を共にした永六輔氏は英語での宛名書きを手伝いましたが、なんと母親に当てたものばかりだったそうです。

どんなことが書いてあるのか知りたいのが人情でしょう。永氏は気になっていたようです。だけど、はがきは私信です。のぞくわけにはいきません。そんなある日、何かの拍子にちらっと中を目にしてしまいました。驚きました。「オレ、元気」と、たった一行でした。深い感動が永氏の胸に広がったそうです。

この名優の逸話、現代人の忘れものに対する一つの問いが隠されているように思えました。

肉親に一筆書く必要がなくなった時代です。すべて電話やメールで済みます。鉛筆と消しゴムを握って一心に紙に向かうこともなく、小さなキーで一瞬に相手に言葉を届けることができます。

かつて手紙は家族の文化でした。かの大戦下、継母となった人に一度も母と呼べずに特攻隊員になった青年は、死地へ赴く最後の手紙に、深い悔恨を告白して「母さんと呼ばせてください」と書き残しています。「知覧特別攻撃隊」の一ページを刻するこの手紙は、悲しくも深い家族の文化を私たちに伝えています。

「男はつらいよ」には、寅さんのアリアと呼ばれる長い長い名調子のせりふがあります。監督は映画の禁じ手といわれるこの手法をあえて寅さんに採らせました。それが胸を打つ稀有の話芸となっています。

その名優は、旅先で毎日老母にささげる一行の思いを書きます。私には映画の中の寅さん一家のぬくもりと重なります。寅さん人気の秘密は、渥美さん自身のこのこだわり、この古めかしさがあるからだと思います。手紙に向かうとき、人は間違いなく自分を見つめます。

本校では、国語の授業で作文があります。また、お世話になった方々に手紙を書いて感謝の意を表す機会もあるでしょう。私は、あらゆる機会を通して、文章（手紙）を書くことが、失われつつある現代っ子の内省の芽をはぐくむことになると信じています。

夏休みの課題に“読書感想文”があります。文章を書くいい機会ですので、ぜひ奮って提出させてください。締め切りは９月３日です。

※　暑さと疲れのせいか体調を崩しているお子さまが多いようです。無理して登校させず、ご家庭で十分体調管理されるようお願いいたします。